

論文審査の結果の要旨

氏名 鈴木 覺

閉鎖性内湾では赤潮や青潮に象徴されるような水質汚濁、生態系劣化を始めとする環境問題が日本の高度成長期に顕在化し、現在でもその解決が重要な課題となっている。閉鎖性内湾の環境問題の背景として、埋立などを通じた産業的利用が経済成長に不可欠であったために、環境保全に対する配慮が十分とは言えなかったという面がある。しかし、経済成長の安定期をむかえた日本にとって、経済という一面的な尺度ではなく、社会文化を含めた多面的な尺度を用いて今後のあり方を意思決定していく必要がある。すなわち、この問題の解決に向けた社会の共通認識を形成するためには、経済的利用のみならず非経済的価値を含めて閉鎖性内湾が有する価値を明らかにし、問題の構造を明らかにすることによって、将来の方向性を提示する必要がある。本論文は、日本の閉鎖性内湾の代表である東京湾を対象として、その多面的価値を明らかにするとともに、将来に向けた東京湾と人々との関係の萌芽的事象を具体的に提示したものである。

第1章は概要であり、研究の背景および研究内容が述べられている。東京湾では自然再生が重要課題として取り上げられ、努力がなされているが、その際の課題を東京湾の重要性および自然再生の技術・手法の面から論じている。そして、経済的・非経済的価値を含めて東京湾の価値に関して近世、近代、現代の歴史をたどりながら行う研究の内容と方法の概要が述べられている。

第2章は東京湾沿岸の利用の経済的価値を多面的に評価している。まず、地域の物流および経済規模を概観した後、生態系サービス等の種々の価値を評価している。そのうち、水産生物育成機能、レクリエーション機能、水質浄化機能、砂浜・干潟の造成に対する潜在的価値、物流コスト低減効果等を見積もった結果、物流機能に比べて、他の機能の相対的価値も小さいとは言えず、中でも水質浄化機能やレクリエーションの潜在的価値が高く評価された。しかし同時に、非経済的価値である、精神的・社会的価値の重要性を明確にする必要性も明らかになった。

第3章は東京湾の利用の変遷を、近世、近代、現代に分類して詳細に分析している。また、第4章においては、その背景となる東京湾の物質収支を時代区分別に評価している。近世においては、漁業の振興を中心に、漁場や漁法を巡る紛争を繰り返しながらも、共同体を形成して東京湾を管理しながら、食文化に貢献するとともに、物質循環の中でも機能を果たしていた。近代においては、埋立の需要に対応して、海の利用権が売買された。その結果、漁獲高は高水準であり、漁村の共同体意識は強いままであるものの、物質循環において流入負荷に対する浄化機能が下回るようになった。レクリエーションでは、海水浴などの保養地としての環境産業化が進んだ。現代においては、漁獲高が低迷し、同時に地域のつながりが希薄化した。

第5章においては、現代の東京湾と人々との関係について、聞き取り調査および著者の体験に基づいて論じている。漁業権の放棄による東京湾と人々とのかかわりの希薄化

の中で、稚魚の放流や清掃活動などが行われている。そして、東京湾の市民的利用に着目して、江戸前の食文化の見直しや海辺とのかかわりを求める市民活動が始まっていることに着目して、その内容を記述・分析している。その中で、市民活動における非経済的価値や人と人とのつながりについて、アンケート結果や当事者のコミュニケーションを素材として分析を行い、非経済的価値の具体的な内容を抽出するとともに、人々のネットワークが構築されていることを見いだした。これは、将来の東京湾と人々とのかかわりにおける重要な萌芽的側面と位置づけられる。

第6章は考察であり、第5章までの成果をとりまとめて、結論を導いている。特に、現代の市民的な活動における東京湾とのかかわりと、近代までの生業におけるかかわりとの類似点および相違点を指摘している。その上で、現代の市民的活動が、東京湾への働きかけと、東京湾からの供給サービスの享受の両輪を通じて、新たなコミュニティ形成を図る可能性があることを指摘し、潜在的な経済価値が存在することと相まって、非経済的な価値を高めていくことにより、かかわりの全体性が構築される可能性があることを結論している。

以上の研究成果は、東京湾を対象として、学融合による社会文化的な観点からその価値の歴史的視点からの評価と将来への方向性を示したものであり、博士（環境学）の学位を授与できると認める。